2. 日露開国交渉

2.1. プチャーチン使節の訪問

- 1843年7月10日 海軍少将エフフィーミー・ワシーリエヴィチ・プチャーチン Евфимий Васильевич
(露暦は-12日) Пятин(1804-83)のシベリア委員会への意見書
アヘン戦争後の1842年の南京条約締結を踏まえ、英国との競争に負けないよう全権代表を中国に軍艦で派遣し、あわせてサハリン島などの探検と日本との交渉の再開を提案
「レザーノフ使節の場合と異なり、船を直接に首都の江戸の港に入れれば成功がより期待できるように思える。長崎ではオランダ商館の商人が交渉を妨害するべく万策を尽くすだろう」
ニコライ1世は提案を受け入れ、8月28日、日本皇帝宛親書に署名したが、対英政策で慎重な外相・蔵相に反対され、派遣延期となる
- 1852年3月 艦隊を派遣し日本に開国を求める計画が米国にあることがわかる
5月 ロシア、日本への使節派遣を決定し、プチャーチンを選任
10月19日 プチャーチン、バルラダ Паллада 号でクロンシュタット港を出港し、英国ポーツマス港に向かう。
11月24日 米国、ペリー艦隊、日本へ向け出発
- 1853年1月30日 ロシア、プチャーチン艦隊、日本へ向け英国ポーツマス港を出発(英国で船を調達)。
3月11日 ニコライ1世の1853年2月27日付「プチャーチン提督に対する追加的訓令草案730号」
通商上の利益の達成こそ真に重要であるので国境問題については寛大でよい。つまりクリル諸島のうち、ロシアに属する最南端はウルップ島でよい。
そのほか、日本の国法に従い、江戸ではなく長崎に入港せよとの指示を含む(もと長崎商館医師でドイツ人シーボルトの提案)
- 夏 プチャーチン艦隊、喜望峰を周り、シンガポール、香港を經由、小笠原諸島父島二見港に到着し、東洋艦隊の3隻と合流して、バルラダ号を旗艦とする4隻の艦隊を編成。このときニコライ1世の訓令を受領。
7月8日 米国ペリー艦隊(旗艦サスケハナ号以下4隻)江戸湾・浦賀に入港。
8月22日 プチャーチン長崎入港。宰相ネッセリローデの書簡の受け取りを要請
9月21日 日本側、ネッセリローデ書簡を受け取る
10月4日 トルコ、ロシアに宣戦布告(クリミア戦争勃発)
11月1日 ロシア、トルコに宣戦布告
11月8日 筒井肥前守政憲、川路左衛門尉聖謨(としあきら)、露西亜応接掛に任命され、長崎へ出立
11月18日 プチャーチン、いったん長崎を出港
- 1854年1月3日 プチャーチン、長崎に再入港
1月18日 プチャーチンと日本側全権・筒井肥前守政憲、副全権・川路左衛門尉聖謨との交渉開始
2月5日 第1次交渉終了し、プチャーチン、長崎出港
2月21日 クリミア戦争でロシア、英仏に宣戦布告
3月28日 英仏、ロシアに宣戦布告
3月31日 日米和親条約締結、日本開国へ
10月21日 プチャーチン、ディアナ Диана 号で、箱館入港
11月8日 プチャーチン、大坂湾に入る。幕府、下田回航を要請下田入港
12月4日 プチャーチン、下田入港

- 12月22日 日露、第2次交渉開始(下田玉泉寺)
- 12月23日 安政の東海大地震(推定マグニチュード8.4)起こる。この地震の起こった日は旧暦では嘉永7年11月4日であり、安政元年は旧暦11月27日から始まるが、一般にこの地震を「安政の東海大地震」と呼んでいる(なお、翌1855年11月11日・旧暦10月2日の「安政の大地震」とは別だが、混同している文書が多い)。この地震により、13メートルの津波が下田港を襲い、ディアナ号損壊。下田はほぼ全滅(総戸数856戸のうち813戸流出、25戸半壊)
- 1855年1月19日 ディアナ号を西伊豆の戸田(へだ)で修理することになり、戸田沖まで曳航するも暴風雨で海が荒れて漂流、宮島村(現富士市三四軒屋)沖で沈没。宮島村村民も安政の東海大地震の被害を受けていたが、乗組員を救助
- 1月24日 幕府、戸田村(戸数約600戸、人口約3000人)でのロシア艦建造を許可。同日、ロシア使節団約500人、戸田村に到着。プチャーチン提督、幕僚、士官用宿舎は宝泉寺、下士官用宿舎は本善寺と決定。日本最初の西洋式帆船の建造が戸田の船大工の手により始まる
- 1月31日 交渉再開(下田)
- 2月7日 日露和親(通好)条約(下田条約)調印
- 5月8日 プチャーチン、ヘダ号で出港

2.2. 日露和親(通好)条約(下田条約)第2条問題

2.2.1. 交渉時の言語

日本側 ロシア語を解する者なし。漢文を解する者あり。オランダ語を解する者あり。

ロシア側 中国語を解する者あり(初代駐日総領事ゴシケヴィッチ)。オランダ語を解する者あり。

交渉は主としてオランダ語となる。

2.2.2. 条約文の検討

条約文の検討は、オランダ語正文を作成し、日本側はその日本語訳、ロシア側はロシア語訳を検討。またオランダ語正文から漢文を作成し、双方でチェック。

2.2.3. 第2条における脱字と誤訳

2.2.3.1. 漢文における脱字(カッコの部分)

「嗣後魯西亜國與日本國之境、応在厄土呂布、蔚布両島間、其厄土呂布全島属日本、蔚布全島及其(他)北方久利留諸島属魯西亜、至哈喇士嶋則日本與魯西亜不分疆域須如往規」

「今より後日本国と魯西亜国との境、エトロフ島とウルップ島との間にあるへし、エトロフ全島は日本に属し、ウルップ全島及び其の(他の)北方のクリル諸島は魯西亜に属す、カラフト島に至りては日本国と魯西亜国との間において界を分かつ之迄仕来之通たるへし」

2.2.3.2. 誤訳

下線部を「ウルップ全島夫より北の方クリル諸島は」と誤訳

2.2.4. サンフランシスコ講和条約締結以後の「クリル諸島」の範囲についての論争の原因

誤訳された日本語訳をもとに、「下田条約締結当時、日露双方とも、ウルップ島を含めてその北方の島々をクリル諸島と理解していた」とする主張が出てきた

→サ条約で放棄したのは、下田条約でいうクリル諸島、すなわちウルップ島以北であり、エトロフ島、クナシリ島は放棄していない

しかし、オランダ語正文、脱字を補った漢文を見ると、ウルップ島以北はクリル諸島の一部と解される→クナシリ島、エトロフ島もクリル諸島である